

高齢者の個性に基づいた認知症チームケアの分析と学びの環境の構築

Construction of the learning environment based on the analysis of dementia team care focusing on personality traits of the elderly

加藤 忠相^{*1}
Tadasuke Kato

今田 兼太^{*2}
Kenta Imada

鈴木 夏也^{*2}
Natsuya Suzuki

石川 翔吾^{*2}
Shogo Ishikawa

竹林 洋一^{*2}
Yoichi Takebayashi

^{*1} 株式会社あおいけあ
AoiCare Co., Ltd.

^{*2} 静岡大学
Shizuoka University

This paper describes a construction of learning environment based on the analysis of dementia team care focusing on personality traits of the elderly. Care practitioners in AoiCare communicate with the elderly using the personality traits. We have analyzed team care interactions based on goals and personality traits of the elderly. Based on the analysis results, we have designed the learning environment in which care practitioners can discuss and share knowledge. The result suggests that the learning environment is effective for getting new idea of care knowledge.

1. はじめに

認知症高齢者が社会で生き活きと生活できる環境はどのようにデザインできるのか。あおいけあでは、認知症の人との関係性構築を目標に、介護施設全体で認知症ケアの高度化に取り組んでいる。これまで、チームケアを分析し、介護従事者のコミュニケーション知の形式知化を進めてきた[鈴木 16]。そのようなケアを実現するには、ケアの有効性や意味を適切に理解し、介護従事者間で情報を共有し、ケアの質を高める学びの環境が重要となる。

本稿では、認知症ケア現場におけるチーム介護コミュニケーションの分析と、介護従事者の学びの環境の構築について述べる。

2. 認知症チームケアにおけるコミュニケーション知の形式知化

あおいけあには介護マニュアルが存在せず、介護従事者が各自の判断で連携を取るチームケアが行われている。柔軟な対応が可能になる創造的な介護現場である一方で、ノウハウやスキル(コミュニケーション知)の多くが形式知化されていない。そこで筆者らは、チーム介護コミュニケーションの特徴の分析によるコミュニケーション知の表出と、介護従事者らに気づきを与える学習環境の構築を進めている(図1)。

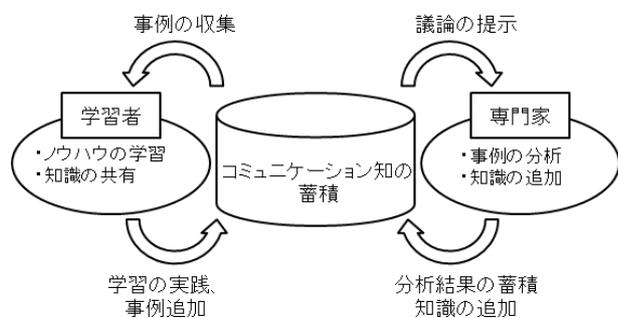


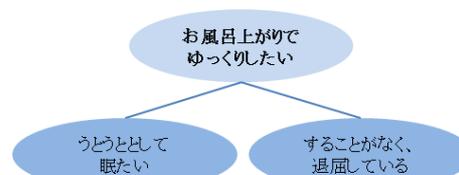
図1: コミュニケーション知の蓄積サイクル

表1: 設計した個性の基本構造

カテゴリ	項目
性格に関すること	習慣, 性格, 癖, 他
嗜好に関すること	好きな音楽, 興味・関心, 他
日常生活に関すること	髪型, 服の色の好み, 他
食事に関すること	好き嫌い, アレルギー, 他
生活歴に関すること	出身地, 居住地, 職歴, 他
家族に関すること	配偶者, 子ども, 親, 兄弟, 他
既往歴に関すること	病気

表2: 高齢者Aの個性(抜粋)

個性の基本構造(一部抜粋)	
習慣	毎日散歩を少しする
家事	全て長男の妻が行う
居住地	85歳より藤沢で息子夫婦と同居



筆者らはこれまで、発話内容や位置情報、ケアゴールなどに着目した分析を行い、分析結果をもとに介護従事者と議論を行うことで、分析結果に対する修正と、ケアの意図やさらなる知識を抽出してきた[鈴木 16]。その結果、正解のない介護における「創造的な方法」と、一方で「やってはいけない方法」の二つの側面から知識を表現し、学びに繋げることが重要であることを見出した。このような観点から、分析と学びによってコミュニケーション知の形式知化を進められる環境を構築している。

3. 認知症チームケアにおける個性の重要性

先行研究より、チームケアの分析では、高齢者の個性や特性に関する情報、及び高齢者のゴールを考慮する必要があるとわかった。そこで、介護記録に基づき、個性を表現するために、表

1 に示す個性の基本項目を設計した。設計した個性の基本項目と、介護従事者のゴールに着目して分析した。対象とした事例2例は、あおいけあのリーダー2名により選定され、分析もリーダーと共に実施した。

事例 1 は、入浴のケアが終わり、ソファに座ってうとうととしている高齢者 A に対し、介護従事者 3 名が順番に話しかけている事例である。事例の中盤で高齢者 A は昼寝を始めるが、最終的に 3 人目の介護従事者が散歩に誘うことに成功する。表 2 に高齢者 A のパーソナル情報から抜粋したものを示す。また、高齢者 A のゴールを図 2 に示す。入浴の直後で眠気があり、眠気を取り除けるほど興味深いものもなく少し退屈している状態である。介護者は高齢者 A の退屈さのゴールを考慮し、日課である散歩へ誘導することで、興味を引くことに成功する。

表 3: 高齢者 B の個性 (抜粋)

パーソナル情報 (抜粋)	
性格	優しい、明るい、最近不安の訴えが多くなった、物盗られ妄想の徴候がある



図 3: 事例 2 における高齢者 B のゴール

事例 2 は、カレンダー作りを行っている際に支払いのことが気になりだした高齢者 B に対し、介護従事者 2 名が対応する事例である。2 名の介護従事者によって支払いは問題ないと説明されても、高齢者 B は不安な様子を隠せない。高齢者 B のパーソナル情報(表3)と高齢者 B のゴール(図 3)を活用して分析した。支払いについて尋ねられた介護従事者は、問題ない、引き落としだから心配ないと伝えることで安心させようとするが、高齢者 B は不安な気持ちになる傾向が強く、支払いについての疑問以外にも不安から生じるゴールを複数抱えていたと考えられる。高齢者 B の抱える複数のゴールの内、一つのみに着目した対応を行ったために、「不安を解消したい」という上位のゴールを解決できなかったと分析した。

4. 認知症チームケアの学習環境の構築と実践

4.1 チームケア学習環境の設計

3 節で分析を行った二つの事例を用いて、チームケア学習会を実施した。参加者はあおいけあの介護従事者 17 名であり、年齢は 20 代から 60 代まで、勤務歴も 1 年以内から 10 年以上までと新人・ベテラン問わず参加した。学習会の流れを以下に示す。また、配布したシートの構造を表 4 に示す。

表 4: チームケア分析シート

設問	小項目
質問 1: 事例中の利用の状態をどう捉えたか	本人の強み 本人の思い 不安なこと、他
質問 2: 事例中のケアの一連の流れについて	ケアの内容 利用者の状態 なぜそうしたか、他
質問 3: もし自分がケアするならば?	質問 2 と同じ

1. 事例の映像を視聴する
2. 配布したシートに、事例中のケアに対する自分の考えを記入する
3. シートに記入した内容をもとに、参加者全体で議論を行う議論を行うことで、分析をより深めながら、結果の共有を行う。介護従事者の考え方や知識を抽出すると同時に、気づきや学びを促進することも目的としている。

表 5: 事例 1 に対する参加者の意見

ケアの内容	利用者の状態・個性	なぜそのケアを行ったのか
声掛けをして体調確認	ソファでうとうとしている(ソファで昼寝することが好き)	眠いだけなのか、体調不良なのかを見極めるため。手の様子も確認している
声掛けをして散歩に誘う	昼寝をしている	紅葉を見せることで、外に興味を持ってもらい、散歩に行きたくなるようにする

表 6: 事例 2 に対する参加者の対案

ケアの内容	なぜそのケアを行ったのか
マンツーマンで向き合える空間で思いを聞く	不安を減らし、高齢者 B のことをわかる、わかろうとしている人がいる事を知ってもらう
皆と離れた場所で、目線を合わせ、ゆっくりと説明する	不安を取り除きたい、訴えに対して向き合いたい

4.2 チームケア学習会の実践

事例 1 に対する議論で得られた意見を表 5 に示す。ソファで眠そうにしている高齢者に対し、起こそうとしたり、ベッドへと誘導したりしなかった理由として、高齢者の個性が挙げられている。散歩に誘う過程においても、紅葉を使った工夫が特徴的であるという意見が挙げられた。この議論により、介護従事者の意図を掘り下げることができ、3 節の分析を深めることができた。

事例 2 の議論では、高齢者 B が不安になりやすい性格であること、認知機能が低下している状態から、必要なのは「不安な気持ちの解消」であるという指摘がなされた。それを受け、「不安な気持ちの解消」を行うための方法が論点となった(表 6)。3 節の分析で問題となった未解決のゴールに対する解決案を介護従事者から収集することができた。

チームケア学習会の終了後に、「学習会を通して新たな考え方は得られたか」、「得られた知識を明日からのケアに活用できるか」の 2 点を 4 段階で評価する事後アンケートを行った。未回答を除き、いずれも 9 割が学習の優位性を示す回答が得られ、学習効果の有効性が示唆された。

5. おわりに

本稿では、認知症ケア現場におけるチーム介護コミュニケーションの分析のため、高齢者のパーソナル情報と介護従事者の思考プロセスを結びつけて収集できる学びの環境の構築について述べた。今後も分析と並行してチームケア学習会を継続して行い、一日を通じたケアのデザインなど、より多くの状況下でのコミュニケーション知の抽出を進めていく。

参考文献

- [鈴木 16] 鈴木夏也, 他: 映像を用いたチーム介護コミュニケーション分析基盤の開発, 2016年度人工知能学会全国大会, 2016.